



写真=イマキレカオリ

## この世界を引き受ける書き手

綿矢りさ

(作家)

幼少期よりキング作品に慣れ親しんできた綿矢りさ。作家としてデビューしたのちに、書くことについてスランプに陥っていたとき、救いの手を差し伸べてくれたのは他ならぬキングだったという。自身の状況や年齢が変わるごとに違った発見をもたらし、いま現在もなお勇気を与えてくれるというキングへの愛を語った。

——ご自身の最初のキング体験はいつ、どの作品だったかを覚えていますか。

**綿矢** 小学生の頃に、吉本ばななさんの『パイナップリン』（角川文庫）というエッセイ集を読んだんです。その中で、ばななさんが『シャイニング』という作品がいかに素晴らしいかを

書いておられて、それでステイヴン・キングという名前を知りました。最初に読んだのは『シャイニング』か『ミザリー』のどちらかだったと思います。

いちばん集中してキングを読んだのは高校生のときで、市立図書館で背表紙の青い文春文庫

の作品を次々に借りていきました。『ランゴリアーズ』とか、ああいう長めのをバートと一気読みしたり、『幸運の25セント硬貨』などの不思議な感じのする短編を好んで読んでいましたね。——いま振り返ってみて、ご自身が小説家になれる過程で、キングの影響は大きかったと思いますか。

**綿矢** ええ、そうですね。キングの小説には、アメリカの普通の生活に出てくる固有名詞がこれでもか、というほど出てきますよね。食べ物とか、生活用品とか、薬局の話とかが、ほかの国の人が読んでいることは眼中に入れてないみたいに、注釈なく当然のように出てくる。そういう固有名詞一つ一つの意味は、アメリカに住んだことがない自分にはよくわからないけれど、逆にそれに、当時はすごく憧れたんです。

キングのそういう名詞の使い方が好きだったので、まだ高校生のときですが、小説を書き始めた頃に「自分の書いているものは100%フィクションだけれど、固有名詞を入れるところになりにリアルでざらっとした手触りのある描写になるのか」と思ったことを覚えていきます。

小説を書くことを仕事にするようになってからは、筆を進められず悩んでいた大学生の頃に『小説作法』（原題「On Writing」）を繰り返し読

みました。それからは私にとってステイヴン・キングは「小説の先生」のような存在なんです（笑）。

——キング師匠（笑）。キングはモダンホラーというジャンルにとどまらない、いわばアメリカの国民作家です。世界中で時代を超えて愛読され、日本でも村上春樹や宮部みゆきなど、多くの読者をもつ小説家がキングから強い影響を受けている。

それは彼の書くものに普遍性があるからですよね。**綿矢** キングの作品は、たとえホラーでも読後感がとてもいいじゃないですか。いま挙げているいただいた作家さんたちの作品もそうですが、キングの小説はあとで話のこまかい内容は忘れてしまっても、読んでいたときの面白さや温かみを読者はいつまでも覚えていてる。世界中の人が彼の作品を読む理由は、そういうところにもあるのかなと思います。

キングがジャック・ケッチャムというホラー作家をすごく褒めていて、帯の推薦文も書いてるので、高校生のときによく読んでたんです。たしかにケッチャムはキングに匹敵するくらい、ときにはそれ以上のアメリカンホラーを書く作家なんですけど、やっぱりどこかで決定的に違う。キングの小説には読者を怖がらせるだけじゃなくて、人情味みたいなものがあるんです。

私はケッチャムもすごく好きですが、キングがこれほど多くの人に読まれるのは、ハートフルな部分を残していて、人に希望を与えるところがあるからだと思います。

ね。

私はケッチャムもすごく好きですが、キングがこれほど多くの人に読まれるのは、ハートフルな部分を残していて、人に希望を与えるところがあるからだと思います。

### 恩師キングの作品に学ぶ

——では、そろそろ具体的な作品の話に入りましょう。綿矢さんの好きなキング作品を、三つ挙げてください。

**綿矢** まず、文庫版の解説を書かせていただいた『ミザリー』ですね。それから『スタンド・バイ・ミー』。本編も大好きですが、キングが中編小説とはいかなるものか、ということについて詳しく書いている「はじめに」の文章がすごくいいんです。三つということであれば、もう一つ、『トム・ゴードンに恋した少女』を。

——では、一作ずつ詳しくお話をうかがいます。まず『ミザリー』の魅力は？

**綿矢** 子どもの頃に映画も観て、主人公の作家を追い詰めていくアニーという女性が妖怪みたいに思えて、とても怖かったんです。でも大人になったいまでは、歯車がずれきった彼女に対する恐怖だけでなく、哀愁のようなものを感じ